

## 東京芸術劇場 社会共生セミナー 第5回 「福祉の現場から生まれる演劇」

2022年6月9日（木）18:30～20:00  
オンライン開催



登壇者 たんぽぽの家 アートセンターHANA

上埜 英世（メンバー）

（※メンバー＝施設利用者）

大西 照彦（メンバー）

佐藤 拓道（副施設長）

行方 雄大（スタッフ）

一般財団法人たんぽぽの家

大井 卓也（スタッフ）

参加者数 52名

情報保障 手話通訳

### 第一部 福祉の現場から生まれる演劇

#### ●たんぽぽの家 アートセンターHANAの活動（大井）

たんぽぽの家では、障害のある人たちが仕事としてアート活動に取り組む施設「アートセンターHANA」(<http://tanpoponoye.org>)を拠点に、障害のある人の暮らしを支え、表現を生きがいや仕事に繋げる取り組みを行っている。

アートセンターHANAでは、障害のある人が絵画や張り子の人形作りをはじめとするアート活動を仕事として行っている。ジャワ舞踊家の佐久間新さんによるダンスのワークショップや、演劇のワークショップなど、さまざまなパフォーマンスにも取り組んでいる。

従来は学びの一環としてダンスや演劇を行ってきたが、近年は多様な人と協働し、自分たちの表現として外部に向けて発信する機会が増えてきた。



写真：衣笠 名津美

2017年には奈良県の事業を受託し、国民文化祭・障害者芸術文化祭の一環として障害のある人もない人も共に協働できる舞台づくりのプログラムを実施。アートセンターHANAのメンバーを含む、公募で集まった一般の参加者とともによりオリジナルの音楽劇を創作、上演した。

2018 年度に行ったダンス公演『だんだんたんぽに夜明かしカエル』は、文化庁の委託事業として行った。10 年以上続けてきた佐久間新さんとワークショップの活動を施設の外に展開することで社会に広げていくため、老人ホームや児童の支援団体などと一緒にワークショップをしながら作品を作り、神戸・東京の 2 会場で上演した。



こうしたダンスの活動を経て始まったのが、新たに演劇をベースとした「HANA PLAY」の活動。たんぽぽの家で行ってきた演劇ワークショップを外に向けて発表していくため、メンバーたちと一緒に一から台本を作った。2019 年度に行った『僕が生まれた日』は、初めての外部発表作品となる。

### ●障害のある人と演劇をどうやって作るのか？（以下、佐藤）

僕は、アートセンターHANA の副施設長として障害のあるメンバーの日常的なケアを行いながら、演劇・ダンスの担当をしている。個人としても俳優として舞台に立つことがある。以前は横浜で舞台に立ちながら福祉の仕事をしていた。自身も脳性麻痺で両下肢に障害を抱えながら舞台に立ってきた。

11 年ほど前にアートセンターHANA を訪れ、初めて障害のある人たちと一緒に演劇を作ることになった。どういうふうに作ればよいのか、悩みながら試行錯誤する中で見えてきたものは、障害のある人と共に生きていくヒントにも繋がるものだった。演劇人としての自身の経験を踏まえながら、障害のあるメンバーと日々演劇の創作を行っている。

### ●「HANA PLAY」での創作の変遷

アートセンターHANA では、僕が来たとき既に演劇プログラムを行っていた。知的障害の方、身体障害・知的障害の両方を持つ方もおり、障害にもさまざまなケースがあった。身体障害のある方で、不随意運動といって自分の思いとは逆に身体が動いてしまう方もいる。そういった人たちと楽しめる演劇とは何かを考えていった。

最初は『手なし娘』という昔話をもとにして演劇を作った。メンバーの障害特性に合わせてキャラクターを作ったり、オリジナルのキャラクターを登場させたりしていた。すごく楽しそうにメンバーそれぞれに達成感があったようだったが、自分たちの生活経験に根差していないことなので状況が想像しにくいようだった。想像できないと台詞も覚えにくく、どうしても指示した段取りで動くようになり、実感のないまま演じているようだった。彼らをもっと能動的にできる環境が必要であると思い、どうしたら彼らが自分のこととして楽しめる演劇を作れるか、施設の担当者と話し合った。



### ●ゲーム的アプローチの試み

まず、演劇のイメージを参加者がどう思っているのかと考えた。演劇といえば、台本があり演出家がいる、台本の台詞を覚え指示を受けて演技をするというイメージがあるが、台詞を発しな

い演劇もあるし、ただ舞台上を通り過ぎるだけで何かを物語ることができる。言葉でうまく伝えられなかったり、複雑な話が苦手だったりしても、動機を自分に引き付けて持っていることが大事だと考えて、自分が演劇でやってきたワークショップを少しずつ試した。何ができるか、できないかも、その過程の中で知っていこうとした。

遊びの中で面白かったのが「息をパスしていく」というゲーム。相手とキャッチボールでコミュニケーションを取るワークショップだが、実際にボールを投げたり渡したりするのが難しかったので、息を投げるように吹いて吸うゲームにした。重度の障害を持つメンバーでもできた。息が短くなっても長くなっても、それを受け取る側がどう受け取るかによって面白さが変わり、その人の個性が出てくるので、楽しく行うことができた。

次が、数字を言うゲーム。人数分の数字から一つずつランダムに言っていく。同時に言ってしまったらアウトというルールで、人数分の数字を最後まで言えるかというゲーム。順番のルールさえわかれば参加できるので、知的障害のあるメンバーも楽しめた。一般の方の見学やワークショップでも一緒に入ってもらえることができ、盛り上がるゲームだった。このようにいろいろ試していき、できること・できないことを見つけていった。

そのほかにも、スローモーション、パントマイム、相手の動きの真似、言葉のキャッチボール、すれ違うことができない吊り橋の真ん中で出会って、どちらが道を譲るか交渉するシチュエーションのエチュードなどを試した。参加者が呆然としてしまったり、難しいと思ったりすることもあったが、実践していくうちに彼ら自身も楽しんでできることを見つげられた。

### ●ゲームを通して気づけたこと

こうした試行錯誤の過程で、ケアの側面から彼らが日常の中でどういうことに困っているかの気づきも得た。スローモーションのワークショップで食事介助のシーンをやった際、「普段より口を開けやすかった」という感想が出てきた。「ゆっくりでいいと思ったから口を開けやすかった」と言う。普段は介助者が口に食べ物を持っていくタイミングで口を開けなければと思っても、自分が思った通りに動けないという身体特性があっとうまくいかない。相手の時間に合わせて身体を動かすことに不具合を感じるのだと気づくことができた。この「時間」については、とても大事なことと考えている。ケアしていると限られた時間の中で何かをしなればと急かしてしまうことがある。時間をかければ一人でできることを、彼らから奪ってしまっているのではないかと、という気づきを得ることができた。

パントマイムでボールを持たずにキャッチボールをすると、とても上手にできた。でも何か物足りない。実際にボールを持ってもらった。するとやはり落としてしまう。うまくできない。でも、その落としてしまうことをパントマイムで再現してみると面白かった。「うまくいかないこと」にこそドラマがあることを、メンバーにも感じてもらえたと思う。

息をパスしていく



数字を言う



いろいろ試していくとメンバーの関心ごとや得意・不得意が見えてくる。電動車いすを上手に動かすことができる、話しているときのゆっくりとした手の仕草に色気がある、独特の間合いでもとてもいい空気になる、にこにこしているのに実は腹黒いキャラクターを持っている、といった演劇創作の可能性を見つけ出していった。

### ●実体験を話すことから生まれた『僕が生まれた日』

中でも面白かったのが、「自分の実体験を話す」ことだった。大西さんと上埜さんの若い頃の経験談がとても面白く、車いすのメンバーみなで行ったスキー教室の話、宿泊訓練でお酒を飲みすぎて夜中に救急車騒ぎになったこと、海外で辛いものを食べすぎて血を吐いてしまった話など、あまり福祉施設で聞かない話がたくさん出てきた。彼らは豊かな経験をたくさん持っている。また、恋愛話は皆さん好きで、すごく盛り上がる。何度話しても経験談として新鮮なものがある。大西さんや上埜さんは養護学校1年生の頃からの知り合いで、恋愛遍歴も知っている。お互いの恋愛遍歴を暴露し合ったりして、話自体も面白いが、彼らの話す姿が生き生きして魅力的だった。こうした彼らの経験談を演劇にできたら面白いのではと思って作ったのが『僕が生まれた日』という作品である。



この作品は、かつて一緒に演劇に取り組んでいたが、ある日突然亡くなられたメンバーの松本圭示さんの話を中心に据え、メンバーのこれまでの経験談を合わせたという構成である。メンバーの話の中に必ず松本さんが出てきて、彼がメンバーに愛されていることがわかってきたので、彼の話を中心にした。

この「実体験を話す」という過程で、演劇プログラムを始めた当初から僕が悩んでいたことが解決していった。まず台詞を覚えることのハードルについて。自分の経験に基づく話であれば基本的に間違えない。イメージや感情の実感そのままあるので、そのときの溢れんばかりの思いを言えたり、自然な仕草が身体に出てきたりする。それが彼らを魅力的にしていると感じた。僕はこの経験談を聞いて、彼らの人生がとても豊かに感じられた。

### ●台本は固めず、揺れながら創作していく

その場の間違いで言った台詞もそのまま台本に載せるようにしている。彼らが彼ららしく楽しんでできることを大切にして台本を書き換える。スタートとゴールが合っていれば中身は多少変わってもよいというスタンスで、揺れながら創作している。「こうしなければならない」となると緊張が強くなって動かしたくない身体が動いてしまうので、それを避けたいと考えた。その場で感じたことを出してほしいので、ここでは必ずこうしてくれと言いつぎないようにしている。彼らの身体性だからこそ見えてくる世界を大切にしたい。ゆっくりとした会話の中でよい風景が見えてくることがある。

身体に障害があるため、いつも人に頼んで冷蔵庫から食品を出してもらっていた人が、1時間かけて自分の力で冷蔵庫を開けて、そこから出したおかきがとてもおいしかったというような、我々の日常では感じられない感覚こそを伝えていきたい。思っていることをそのまま表出できる環境

を作りたいと、試行錯誤しながら努めてきた。

## ●『僕が生まれた日』より、北川憲一さんが話す冒頭シーン

～上映～



聞き取れない言葉があると思うが、「僕が生まれた日。3月。大雪だった。電車あかん。バスあかん。タクシーで行った。僕生まれた。箱に入った。僕助かった。助かった。助かった。」と言っている。

字幕をつけようかと思ったが、一方で聞き取るのが難しいことをわかりやすくすることで、何かを失ってしまうような気がした。日常的にケアをしていると、聞き取れないことはよくあり、何度も聞き返してやっと話している内容や理由がわかることがある。そのときの伝えようとする、または、わかろうとする摩擦やエネルギーのようなものを観客にも感じてもらいたいと、字幕を入れずに上演した。最後に彼が言っている台詞がわかるように、相手役のスタッフがこの言葉を繰り返すシーンを作った。そうすることで、観客側のいろいろな解釈を誘うことができたと思う。

必ずしも、表現としてわかりやすいのが正解ではないと思う。彼らが話している姿や内容はとても魅力的だ。この作品は北川さんのエピソードである「僕が生まれた日」をタイトルにした。わからなさを演劇の中に取り込んで観客と共有することで、何か得るものがあればと思う。

## ●『贅沢な時間』の創作

近畿大学舞台芸術専攻の矢内原美邦教授ゼミの学生と『贅沢な時間』という作品を創作した。初めての一人暮らしで、自分の手で冷蔵庫を開けてそこにあるおかきを1時間かけて取り出して食べた味が忘れられないというメンバーの話を中心に、障害のあるメンバーにとっての「時間」をテーマに物語を作った。日頃、ケアすることで彼らの時間を奪ってしまっているのかもしれないという思いがあった。「自分の時間をどのように有意義に使うべきなのか？」ということ『贅沢な時間』のテーマにした。



写真：草本科枝

学生たちという初めての外部の方との試みで苦労があった。コロナのためオンラインで稽古したが、メンバーのスピード感と学生たちのスピード感に大きな差があり、別次元にいてになってしまうので、調和のとり方を考えた。それぞれが時間を意識したり、相手を思って歩み寄りたり、逆に突き放して一人で踊ってみたりという、関係性に立体感がある作品になったと思う。

さまざまな身体性があることが大事。別々の身体がどうやってコミュニケーションを取ろうとするかが垣間見えた。いろいろな身体性と時間軸が交じり合うことで、演劇の可能性が出てくる

と思う。メンバーも学生とすごく楽しそうにしていた。



### ●最後に

演劇の創作を通じてメンバーの感じていることや経験談を聞き、実際に動いて得意・不得意を発見し、その人なりの表現方法を考えていくと、世界の見方がそれぞれにあることが体感できる。一緒に生きていく、この人が生活するには何が必要なのかに気づいたりもする。演劇の活動は、共に生きるヒントになっていると思う。

障害のある人たちのアート活動においては、本人たちの「やりたい」を実現できるこ

とが、何より大事だと思っている。次の創作ではシェイクスピア演劇をと考えていたが、上埜英世さんが能の『葵上』を「語り」※注で行ったことがあり、みなで『源氏物語』を演じたいということになった。皆さんの恋の話やそれ以外の話も挟み込んで、どんな『源氏物語』ができるか。11月末頃に奈良で上演を予定している。観に来ていただきたい。

※注「語り」 民話や創作童話、自分史などに自分の思いを重ね合わせて語る舞台表現

## 第二部 障害のあるメンバーとのディスカッション

佐藤（副施設長）： これまで10年以上ワークショップをしてきてどんなことを思ってきたか。

大西（メンバー）： はじめは演出の勉強をしようと思って演劇に参加したが、いつの間にか主演級になっていた。

行方（スタッフ）： 演劇を創る中で苦労したエピソードは？

大西： ちょっと前に上演した『とある村』という作品が、韓国の方が書いた話を日本語訳したもので、普段使わない言葉がいっぱい出てきて難しかった。

行方： 普段使わない言葉とは具体的には？

大西： 一番印象に残ったのは「アイデンティティ」という言葉。何のことか全然わからなかった。

佐藤： 『とある村』は、鳥取の「鳥の劇場」さんのプロジェクトで、韓国の方々と一緒に公演をするはずだった作品。コロナの影響でオンラインでのリーディング公演になった。台詞があるものなので、「アイデンティティ」というよくわからない言葉が出てきて、話も不条理劇だったので、理解が難しかったが、面白い部分も多分にあった。

行方： プライベートなこと、実体験を演劇にされることについてどう思うか？

大西： 私たちのことを細かく聞き取って台詞にしてくださいるので、わかりやすい。

行方： 佐藤さんが用いてよいエピソードか、必ず確認を取ってくれると聞いている。

佐藤： 皆が話したくないことは演劇にしないことが大事なので、20回ほど確認を取る。

大西： 佐藤さんは演劇以外のプログラムにも参加して、みんなのことをよく理解し、信頼関係をつくってくれている。

行方： 男性メンバーがトイレの中で稽古の続きをやっているのが印象に残っている。

大西： トイレの中で時間があるときに一緒に稽古する。全ては信頼関係。

行方： 演劇プログラムに参加するきっかけは？

上埜（メンバー）： 私は40年ぐらい「語り」をしてきた。

佐藤： 「語り」のプログラムは演劇よりもずっと前からやっていて、上埜さんは40年以上キャリアがある。障害のある方の詩に曲をのせる「わたぼうしコンサート」を全国の小学校・中学校で行っており、それと併せて民話や昔話、創作童話などの「語り」の公演も行っている。その活動で上埜さんは長く活躍している。

行方： 「語り」から演劇に、どのように繋がったのか？

上埜： 「語り」とはまた違う雰囲気のことができるかなと思って始めてみた。

行方： 「語り」とは違う雰囲気とは？

上埜： 「語り」は一人で演じるのでミスは自分の責任になるが、演劇はみんなで作るもので、それも楽しそうだった。

行方： 『贅沢な時間』で主演級の活躍をしていたが、裏話はあるか。

上埜： 一人暮らしを始めて、ゆとりを持たせた時間、一人になれる時間ができた。自分で四つ這いになって冷蔵庫のところまで行くことができた。そのとき冷蔵庫の外側って暖かいんだなと思った。そのシーンが忘れられない。冷蔵庫というのは外と中で世界が違うんだなと。

大井(スタッフ)： 行方さんはスタッフとして演劇プログラムに関わることで、発見はあったか？

行方： 演劇の練習など、普通にケアをしているときよりもメンバーと交流が増えた。普段は最低限の暮らしのことしか話さないが、稽古していない時間にシーンの感想や意見を求められるなど、演劇をしたから体験できたことがあった。一緒に経験することによって、より絆が深まるというか、メンバーとスタッフ以上の、対等な信頼関係ができた感じがする。

上埜： 家族のような温かさがある。

大井： 演劇ではケアする人／される人という分断を乗り越えられる。役割を一緒に経験することで、家族のような、普段の付き合いでは越え難い壁を越えられるのではないか。

佐藤： 演劇を通して、普段聞けない話を聞くことができる。彼らの生活のリアル、知らなかったことを知って、より深く彼らを見られるようになった。表現活動だからこそできることと思う。普段の生活の中で昔の恋愛の話を聞くことはないが、『源氏物語』を上演するのだから聞かなきゃいけないんだ、と言うことができる。昔の恋愛の話などは心が傷つくこともあるので気をつけたいが、演劇を通じていろいろなことを知ることで、メンバーの生き方について考えることもできる。

## 質疑応答

### ●メンバーの意向の反映

[質問者]： たんぽぽの家の演劇活動は、部活のような位置づけで行われているのか？ あるいは日々の活動の一つの選択肢として、メンバーさんの希望に基づいて行うのか？ メンバーさんは活動のジャンルを自分で選んだり、ジャンルを行き来したりできるか？

佐藤： メンバーのコミュニティカレッジ・プログラムとして演劇活動を位置づけ、絵画などと同じように日中のプログラムとして行っている。年度の初めに個別支援計画を立てる際に面

談をして何をしたいかを聞いて決めている。プログラムは多彩で、アトリエにずっと入っている方もいるし、演劇に全然参加しない方もいる。活動の様子を見て演劇に入りたいと思うようになる人もいる。大西さんの場合は、見学されていたところを僕が誘って入ってもらった。

大井： たんぼぼの家は障害のある人のアートセンターとして活動しているが、ここに来る方は決してはじめからアート活動が好きという方ばかりではない。したいことを一緒に探していくようにしている。ご質問の通り、ご本人の希望に沿って、どのようなことができるか探していくと活動の一つとして演劇があるという形だ。

### ●社会福祉施設でのアート活動

[質問者]： 社会福祉法人で新卒採用は行っているか？ 都内にもアート活動を行う社会福祉法人があるか？

佐藤： 採用のための職場説明会を行っているのでホームページで日程など確認してほしい。都内の状況には詳しくないが、横浜市では「カプカプ」さんが身体表現のワークショップを行っている。

大井： たんぼぼの家でも見学を随時受け付けている。また、障害のある人のアート活動について知りたい方や相談ごとがある方向けに「障害とアートの相談室」という窓口を設けている。関東にこういった施設があるかについても具体的にお答えできる。

### ●演劇に繋がる活動のバリエーション

[質問者]： どんな遊びをしたか？また、やってみたい遊びはあるか？

佐藤： スローモーション、しりとり、相手の話を聞いてそのまま再現する、シチュエーションを設定し音楽に合わせて動く、単語のキャッチボールでコミュニケーションを取るなど、いろいろな遊びをやった。フィジカルなものは難しいので、言葉でできるものを多く行った。モニターで映画のワンシーンを見ながら再現するといった遊びもやってみたい。

[劇場]： 普段福祉の現場と接点のない方が「HANA PLAY」のメンバーと創作活動を行うことによって、どのような発見や気づきがあったか？近畿大学の学生と共に作った作品などで感じたことがあるか？

佐藤： ダンス専攻学生の一人は、ダンスの動きに全く知らない身体言語の語彙のようなものを感じて新鮮だったと肯定的に話してくれた。何より和気あいあいと家族のようにできることが嬉しかったとも言っていた。脳性麻痺の学生が1名いたが、学校ではダンスのスピードやリズムを周りに合わせなければと思っていたが、「アートセンターHANA」のダンスでゆっくり動くことに魅力を感じた、自分も急いでやる必要はない、もっと自分らしさを発揮できるダンスがあるのではと気づきを得たと話してくれた。大阪の「DOORS」というワークショップ・フェスティバルでは、メンバーもワークショップの講師として参加。障害のある人の日常を話してもらい、一般の方も交えてその場で再現することを試みた。知識としてではなく、エピソードとしてその人の生活の中に実際に入っていくことで見えてくるものがある。「(障害のある人は) こんなふうに住んでいるんだ」という気づきもあったようだ。



## ●演劇創作のプロセス

[劇場]: 台本があり台詞が決まっていますが、その通りにせず、揺れながら台本を練っていくということを面白く感じた。一方が他方に合わせるのではなく、一緒に揺れながら進んでいけば、当初考えていた正解とは違うかもしれないが、皆で作上げたものなので誰にとっても納得できるものになるのではないか。最初から決めて作るとどうしても失われてしまうものがある。「揺れながら作る」ということが、共生について考える上でヒントになる。

佐藤: 台本通りにやることで本人の実感が伴わず、なぜこれをやっているのかわからないまま演じる場合がある。でも自分の感情に近いことであれば、台詞になくてもどんどん言葉が出てくる。障害で口が動かしづらく、喋りにくい言葉もあるので、彼らがより演技しやすく、喋りやすいものになればと思う。演出上こうしてほしいということもあるが、僕の持っている世界観を彼らに実現してもらってはあまり面白くない。僕の世界が揺れ動くことが面白く、そこにこそ発見があるので、揺れていたいと思っている。演技も決めた状態で舞台上立つのは面白くない。舞台上で揺れ得る状況が好きで、それこそがそこに「いる」ことを再現することではないか。きちんと揺れて、そっちでもよし、こっちでもよしともいう可能性を芝居で示すことができるのではないか。

[劇場]: メンバーのゆっくりとした動作をじっと皆で待つ時間は、いろいろなものを内包している気がする。シーンとしている中で何かの動作をしようと一生懸命な瞬間を皆で見守る眼差しや空間には、さまざまなものが含まれていると思う。

佐藤: 演劇にはテンポも大事だが、僕が思っているテンポは従来の演劇観でしかない。彼らのテンポに寄り添うことで、もしかしたら全然違う風景が見えてくるかもしれない。待つ時間は大事だと思っている。能に近いかもしれない。ゆっくり動くことで現れる色気や、僕の語彙で表現できないものを持っているように思う。

[質問者]: 演劇経験のないメンバー（特に、多動で落ち着いていられない方や言語コミュニケーションが難しい方）にとっての演劇との出会い方のアイデアがあるか。

佐藤: 相手に物を渡すとか、音楽を流しているところで自由に歩いたりするのも、ダンスのようだが演劇でもあると思う。静かな空間でその人がどのようにしているか、曲を流したときにどのような反応をするのかということから見るができると思う。

大井: 「HANA PLAY」では台本をあて書きしているが、本人がどのようにすれば舞台上立つかを考える。言語でのコミュニケーションや表現が難しい方や台本を覚えてストーリーを考えて喋るのが難しい方が、どういう役割なら物語に入れるかを考える。

佐藤: 演劇に向き合わせようとする意図は全くない。その人が何に興味を持っているのかを見なければならぬと思っている。まず歩いてもらって、空間の歩き方や興味などを見る。この人が何に注目しているのかを観察し、そこに変化を加えたときにどう反応するのか、それが演劇と合うのか、合わないのかを見るのが大事だと思っている。演劇という手法を逆にケアに持っていくという考え方が近い。その人の興味や好きなものを探る行為に演劇の遊びを持ってくるのだと思う。

## ●障害のある人との演劇活動の始め方

[質問者]: 障害のある人と演劇を作るとき、どんなことから始めればよいか？ 福祉施設の人

が日々の活動の中で取り入れる場合と、劇場のプログラムとして取り入れる場合で異なると  
思うが、場所があることが大事なのか、あるいは、演出や演劇の経験がある人が施設や劇場  
にいることが大事なのか。

佐藤： 自分なりの演劇観があると思う。紙芝居や映像、ドラマやアニメの仮装などから始めて  
もよい。まずみんなの「やりたい」が何なのかを見て、試行錯誤していくというアプローチ  
もある。最初はゴールを設定するより、今、目の前に起きていることを見ることのほうが大  
事で、結果的に発表を目指すようになるかもしれない。僕も最初から演劇をやるつもりはな  
く、ケアをやるつもりだった。普段の会話でドラマの話をしていたら、シーンを切り取って  
やってみるといったアプローチもある。その上で劇場の人や演出家に入ってもらえれば何か  
化学反応が起きるかもしれない。そういう段階になってから入ってもらうのがよいのではな  
いか。